

イヌスギナ *Equisetum palustre* L.

【評価理由】

個体数階級 1、集団数階級 3、生育環境階級 3、人為圧階級 3、固有性階級 2、総点 12。温帯性の植物で、愛知県は分布域の南限にあたる。平野部の開発圧の高い場所に生育している。

【形態】

夏緑性の多年生草本。地下茎は長く匍匐し、しばしば群生する。直立茎は高さ 20～60cm、基部で直径 2～4mm、上半部で規則正しく枝を輪生し、主軸の先端部は長く伸びて枝をつけない。葉鞘は長さ 1～1.2cm（歯片を含む）、下部の枝の最下の節間は主軸の葉鞘より短い。枝は斜上し、長さ 5～20cm になる。胞子のう穂は主軸に頂生し、長楕円形、長さ 1～2.5cm である。

【分布の概要】

【県内の分布】

西：33 安城（堀田喜久 7265, 1999-9-26）。
尾：54 一宮西部（渡辺幸子 2259, 1995-7-11）、
55 稲沢（渡辺幸子 5343, 2003-5-21）。木曽川
沿いの低湿地に点在する。26 豊田南西部（河
合町, アジア航測環境部 s.n., 2000-5-17）に
も生育していたが絶滅した。

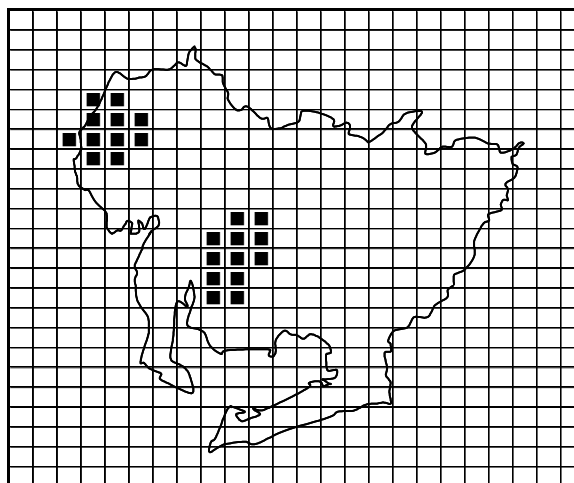
【国内の分布】

北海道および本州（長野県や関東地方以北、
愛知県、岐阜県、滋賀県、島根県）。東北日本
では普通の種類である。

【世界の分布】

北半球の温帯に広く分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

日当たりのよい水湿地に群生する。休耕田に生育することもある。愛知県では水田のあぜや小水路のわきなどに生育している。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地			○	
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

生育地点は限られているが、ある場所では群生している。平野部の開発、とりわけ耕地整理による乾田化が減少の主要因と思われる。豊田南西部では清掃工場建設のアセスメントの際に発見されたが、「あった」という情報が伝えられた時には、すでに別事業である高速道路建設のため生育地が破壊されていた。

【保全上の留意点】

特別な環境の場所に生育しているものではないので、生育地の個別的な保全が必要である。草刈り等の軽微な攪乱は個体群が存続する上では問題とならないが、耕地整理や宅地化などの大規模な攪乱があれば存続できない。平野部の湿地や未整理耕地は、そこを利用している、あるいは近傍に住む人に不利益をもたらすため、行政としては今までなるべく消失させるよう努力してきた。しかし、その努力は、一方でそのような環境に住んでいる生物の生活の場を奪い、生物多様性の減少を招いている。住民の利益と生物多様性の保全をどう調和させるかは、今後の重要な課題である。また、本種が生育できるような湿地は、過去の稲作様式を示す文化遺産としても重要である。

【特記事項】

スギナの胞子茎の先端に胞子のう穂をつける型（ミモチスギナ）と混同しないよう、注意が必要である。過去の文献では上記 4 区画以外の場所でも記録されているが、標本での再確認が必要である。

【関連文献】

保シダ p.23, 平シダ p.59, 学シダ I p.283.
倉田 悟・中池敏之(編). 1985. 日本のシダ植物図鑑 4: 50-54. 東京大学出版会, 東京.